
とある最弱の幻想作り

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最弱の幻想作り

【Nコード】

N6824Z

【作者名】

carzoo

【あらすじ】

最弱と認めていた少年には、最強すぎる力があつた。少年は、そのチカラとどう向き合い、幻想を作り出していくのだろうか

プロローグ(前書き)

よろしくお願ひします

ブローグ

学園都市

そこは、東京西部の未開拓地を開発してできた最先端の技術を誇る、人口の8割を学生が占める学生の街だ

しかし公にはしられていない秘密がある

それは“超能力”

言葉では表せないようなことをして、一人につき一人の能力を発現させている

これは、その学園都市において、オンリーワンのスキルを持ち、最弱でありながら、最強であった少年の物語

The story of a boy's strongest
magic begins when the interse
ction of science and (魔術と科学が交わる
とき最強の少年の物語は始まる)

7月16日。

ここ、学園都市は、夏休みが始まる少し前でもあった。その朝午前

3：00まだ闇に包まれている学園都市で少年は目を覚ました。少年は毎日この時間に起きて夜の学園都市を走るのを日課としていた。

「ふあゝ。まだ暗えなあ。」

そういうと少年は、ランニングをする為のジャージに着替えて、自分が住んでいる寮を出る。

しばらくランニングをしていると、その辺にたまっている不良が一箇所にたまっているのを見つけた。

どうやら何人かで一人を囲んでいるらしい。

「(うつわ)。どうしようちょっと様子でも見てみつか?」

不良の声に耳を傾けるとまあ、大変なことになっていた。

「おいおい娘ちゃん。こんな時間にあたりを歩くななんて俺たちと遊びてえんじゃねえのか?」

「違います!とにかく離してください!」

「まあまあ、俺たちと遊ぼうぜ?」

まあ、何人かで女子を取り囲んでいるようだ。少年は、とりあえず助けてみるかと声をかける。

「おいおい、何人もで女子囲んでんじゃねえよ。」

「ああ?てめえなにもんだあ?」

「とりあえずやっちまおうぜ」

「に、逃げて!」

不良は、少年にナイフを構え襲ってくるが、少年は、それらを全て

かわし、蹴り上げる。

「てめえ、調子にのんなよ！こつちにゃあ能力者もいんだ！」

「そうだぜ、くらエガキ！！！」

つと、一人の不良が、少年に対して炎の弾を撃ってくる。少年は、それを今度は、“受ける”

やったと勘違いした不良たちは、品のない笑い声を上げて、

「ざまあみる、ヒーロー気取り」

「いきがるからこんなことになるんだ」

「さあ嬢ちゃん俺たちと一緒にいこうか」

「い、いや……」

少女は、何も関係ない人間を巻き込んでしまったことに罪悪感を覚えながらも抵抗する。

「おいおい、誰がやられたっていったんだよ。あんなの俺のルールにあつていいわけねえだろ？」

全員がビク！つとして声をしたほうこうに振り向くと、そこには先ほど、焼かれたはずの少年がたっていた。“無傷”で

「てめえ！何で生きていやがる！」

先ほど炎を放った不良は、焦った表情で少年に問う。少年は不適に笑い、

「簡単な話だ。

この世にはそこに“ある”っていう“現実”と

そこには“ない”けれどもあってほしい、っと思う“幻想”
の二つがあんだ。

例えば、お前がさっき放った火の玉が“現実”で、

俺がまったくの無傷だったのが、俺が、ダメージを受けてないっ
て言う“幻想”を作り出したからだ

それこそが、俺が生まれた時から持っていて、

俺のような最弱が一番必要が無いものと認識している、世界最強の
能力

“ある”を“ない”に“ない”を“ある”にしてしまう

“幻想作り（ファンタジーマーカー）”だ

炎を放った能力者が怯えたような顔をするが、また一人が出てきて、

「そんなのはつたりだ！そんな能力聞いたことねえ！」

一人が風の砲弾を少年に放つが、少年は、放たれた瞬間にそれを消
す。

「嘘…だろ？」

「こんな能力、書庫にはねえぞ！」

「当たり前ジャン。俺LEVEL0だし？」

さらに少年は、にやりと笑って、不良に近づくと、不良は、おびえきった表情で、

「無理だ！勝てるわけがねえ！」

「逃げるぞ！」

不良たちはそのまま逃走して言った。先ほどまで囲まれていた少女が少年に近づき、

「助けていただきありがとうございます。」

「いんや、俺は何もしてねえぜ？」

少年は微笑んで、答えて、

「そついや、お前、何でこんな時間にここにいるんだ？多分中学生だろ？」

「いえ、ちょっと、明日の授業にいるものを買うのを忘れちゃって、買いに行ったら帰りに囲まれたんです。」

「ふ〜ん。じゃあ送ってやるよ。家どこだ？」

「いいんですか？」

「いいっていいって、どうせ俺走ってただけだし、」

「そうですか、柵川中学の学生寮です。」

少女は申し訳なさそうに答える。

「んじゃいこっか」

二人はそういって、闇の学園都市を歩いていった

柵川中学、学生寮目的の場所に着いたところで少年が帰ろうとする
と、少女が話しかけてきて、

「あの！メアド交換しませんか？えっと……」

「ああ、俺、暁冬風、高1な、いいよ。交換しよう」

「はい！私、佐天涙子って言います。」

そして、冬風は、涙子とメアドを交換する

「じゃあな涙子」

「はい！ありがとうございます！冬風さん！」

そういつて、涙子と別れた冬風は、また、闇の学園都市を走って
いった。

This is the only introduction
to the story. (これは、物語のほんの序章。)

プロローグ（後書き）

有難うございます。

応援していただけると光栄です。

超電磁砲組との遭遇（前書き）

うーんこんな感じでいいのかな？

超電磁砲組との遭遇

朝、涙子を助けた冬風は、特にその後何もなく、家まで戻って、シヤワーを浴びていた。朝食は、自分で作った炒飯と、アイス3個だ。それを食べ終わりがけたころに、寮のチャイムがなった。

「冬風、助けてくれ、金がなくて何も食えなくて死にそうなんだ。」

まあ、かわいそうな台詞に聞こえるが、彼は、無視して、アイスを食べる。助けを求める声は、先程からまったく変わっていない。

アイスを食べ終わって、一段落した冬風は、部屋のドアを開ける。そこには、ツンツツとした頭にかわいそうなほど無気力な少年がいた。

「おい当麻。これで何週間連続だ？この不幸」

「そのようなことを言わずにどうか助けてくださいませっか？」

「うち！しゃあない。これやるよ、昨日かった鯖缶だ。」

「サンキュー冬風！これで当麻さんの今日の朝は安全だ！」

そういうと、風のように自らの隣の部屋へ帰っていった。

彼は上条当麻という。

右手に“幻想殺し（イマジンプレーカー）”という神の奇跡ですらも打ち消すことのできる力を持っているのに、ここからは推測だが、その力のせいで、滅茶苦茶不幸なことにあい、さらにその不幸のおよそ全てが女子がらみという一級フラグ建築士であり、不幸が代名詞の不幸少年でもある。

冬風は、自室に戻り、ケータイを持ったことを確認すると、今度はココアを飲み始める。

気づいた方もいるかもしれないが、彼は、超がつくほど甘いものが大好きなのだ。

登校時間になったので、部屋の鍵を閉めて、当麻の部屋まで行き、

当麻と一緒に学校に行く。っで、合法ロリといわれている、冬風の担任月詠子萌の授業を受け、解散する。

それが彼の日常だったが今日は違った。帰りに、こんなメールが涙子から入っていたからだった。

『今日、LEVEL5の方とお会いするんですが、冬風さんもどうですか？』

とりあえず暇だったので、行ってみることにしたのだが、これが、ちよつとした間違いだった。

待ち合わせしていたファミレスの前、そこには、涙子と、頭に、花を乗せた少女がいた。

「あ！冬風さん。来てくれたんですね？」

「ああ、なんとなく暇だったからな」

「佐天さん、その方は誰ですか？」

「俺？暁冬風。ただのその辺にいるコーコーサーさ」

「そうですか。初春飾利です。」

簡単な自己紹介を終え、ファミレス内を見る目に入ったとある光景。小柄なツインテールの少女が、茶髪の短髪の少女に抱きついている光景。どう考えても百合な光景だった。しかも冬風は、その茶髪の短髪の方を知っていた。

「おい、あれは……どう説明してもらえばいいんだ？」

「さ、さあ」

「驚きの光景ですね」

〈数分後〉

五人は、ファミレス前に集まっていた。その辺の男から睨まれている、先程の光景で帰りたくなって引いている冬風は割愛しておこう。

「……というわけで、とりあえずご紹介致しますわ」

その空気の中、ツインテールの少女が喋り始めた。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利ういはる かほりさんですの」

「は、初めまして。初春飾利……です……」

あまりにも緊張して、声が後半出でおらず、聴力がいい冬風でさえ最後のほうは聞こえてなかった。

冬風の言葉で美琴がハツと我に返り、初春と涙子の方に視線を戻す。そこには、ぼかんとしている二人の姿があった。今日の主賓は彼女達。それを忘れてはいけない。

「ご、ごめんね。ちよつと訳有りだから熱くなつちやつた」

「あ、いえ、大丈夫ですよ！　ちよつと驚いただけですから」

「そ、そうそう。大丈夫です！」

美琴が謝罪の意を示し、それに初春と涙子の二人が恐縮すること、何とかその場は治まった。

まだ冬風は忍び笑いを漏らして、美琴に睨まれるが

「もう、お姉様だったら……ゲームとか立ち読みではなく、もっとこ
うお花とかお琴とか、ご自身に相応しいご趣味をお持ちになれませ
んの？」

「うっさいわね。大体、お茶やお琴の何処が私らしいって言うのよ
？」

美琴と黒子の先導の元、五人は美琴の提案で近場のゲームセンター
へと向かっていた。

「何かさ。全然お嬢様じゃない？」

「上から目線でも無いですねえ」

「おいおい、あの戦闘狂がお嬢様なわけねえだろ」

「……と言うか、曉さ「冬風にしてくれ。」「…冬風さん。御坂さん
と知り合いましたね」

「んー……あれは知り合いといえるのか？」

「さっきの話どおりだったら違うかもしれないね」

「それでも、あの御坂さんと知り合いだなんて羨ましいです……」

「LEVEL5なんて、人格壊れた奴ばかりだぞ？一方通行とか、
麦野とか、」

「えっ？LEVEL5ともお知り合いなんですか？」

「まあ一応な」

「……」

「いやー、冬風さんすごい人ですね」

「……おい、涙子、前前」

「へ？……あいたっ」

「……！す、すみま……ん？」

どうやら美琴とぶつかったらしい。

「御坂さん？」

「どうなさいましたの、お姉様？」

立ち止まっている美琴の横に黒子が歩み寄り、いたずらっ子の笑いを見せる。

「あらー…クレープ屋さんにご興味が？」

つつ、とチラシから美琴に視線を移す黒子。

「それとも、もれなく貰えるプレゼントの方ですか？」

「つつ」

黒子の言葉に、美琴はびくりと反応。冬風はまた笑いを漏らし始めた。

「な、何言ってるのよ！ わ、私は別にゲコ太なんか！ だって、蛙よ？ 両生類よ？ 何処の世界に……」

「おいおい、誰ももらえるプレゼントがゲコ太とは言ってないし、俺の情報網の中には、お前がそのキャラクター大好きって入ってるだけだなあ、てか、別に隠すことじゃなくね？ 好き、きらいは人の勝手なんだから」

「いや、だ・か・ら・、私は別にゲコ太のことなんか！」

往生際が悪いのか、美琴はまだ反論を試みる。冬風は、そんな美琴に止めを刺す。

「おいおい、じゃあそのかばんにぶら下がってるストラップは何ナノかな？」

「っツ！」

「あきらめろ。お前は隠すのがへたくそだ」

「くくく」

「ふふ」

「まあまあ、お姉様」

「なにしようかな」

「何でそんなご機嫌なんですか？」

「そいつは、30分に一回は甘いもの食べないと機嫌が悪くなるのよ」

「なんなんですよその体質」

あのあと、クレープ屋に来た、御一行は、とりあえず何を注文するか迷っていた。冬風は、ずっと甘いものが食べられなくてイライラしていたのだが、甘いものが食べられるとあって、ものすごく上機嫌である。順番的には、初春、冬風、涙子、美琴、黒子なのだが、ここで悲劇が起こる。

それは、冬風の番のときだった。

「すいませ〜ん、ここで最後の1個です。」

店員が、冬風に、おまけを渡した瞬間だった。冬風は、ヤバ！と思った顔つきで後ろを見ると

「ズーン」

口から擬音語が出るほど落ち込んだ美琴がいた。

「ありゃ？冬風さんやばくないですか？」

「涙子、早く買っとけ。俺が、電力を回復してくる」

冬風は、美琴に近寄り、

「おい、美琴、俺のこれやる。俺はいらねえから。」

「ほんと！？」

キュピーンっと、擬音語が、出たと思うほどの速さで立ち直る。

「ああ、ほれ」

「ありがとう!!」

美琴は、上機嫌で、クレープを買いに行った。

「早いですね。冬風さん」

「ガキの扱いにはなれてる」

「はは」

「そうか? …… つと、美琴のお帰りだな。ちゃんと買ったか?」

そこにクレープを買い終えたらしい美琴が戻ってきた。鼻歌混じりであるため、調子は完全に戻ったらしい。

「ちゃんと買ったわよ。……黒子に頼まれたトッピングは理解できないけど」

「大丈夫だ、美琴。流石の俺にも理解できない」

「どうかしたんですか? …… (微)」

美琴が手に持つ二つのクレープのうち、黒子所望の納豆生クリームクレープを見て、流石に三人とも引いた。

「ま、まあとりあえずベンチ行くか」

その後、黒子と初春が確保していたベンチに三人は向かい、五人で銘々のクレープを食べ始めた。

「冬風さんってほんとに甘いもの好きだったんですね。」

「あいつ私から逃げるときでも甘いもの食べてること多いから」

「よく太りませんね」

「人類の神秘ですの」

冬風は、あまりにもクレープに夢中で耳に入っていない。

「……？」

「どうした？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど……昼間っから防犯シャッター下ろしてるんでしょうか？」

ベンチに座っていた初春があることに気がついた。

彼女たちの後ろの通り。道路を挟んで反対側にある銀行のシャッターが下りているということに。

冬風は、はっ！として、

「やばい！ありゃ強盗だ！」

冬風の言葉は、爆発音でかき消された。

The story will go. Leads to de
struction together with (物語は進んで
いく。破滅を導くものと共に)

超電磁砲組との遭遇（後書き）

こんな感じがいいんですかね？

事件解決！（前書き）

実は超電磁砲あんまりよく知らないんで、ほかの作者さんのストーリーを読んで書いたんで変なところとかあつたら教えてください。

事件解決！

爆発したシャツターは、破片となって地面に散らばり、中からモクモクとあからさまにやばそうな煙が立ち上っている。

「な、何なの？」

爆発音で、体を丸めていた涙子が、疑問の声を上げる。

「初春！警備員への連絡と怪我人の有無の確認！ 急いでくださいな！」

「は、はい！」

黒子は風紀委員を示す腕章を付けながら、初春に指示を飛ばす。

そして、同じく腕章を付けていた初春は、黒子の指示通りに携帯電話で警備員への通報を始めた

「黒子！」

「いけませんわ、お姉様。学園都市の治安維持はわたくし達、風紀委員のお仕事。今度こそ、お行儀良くしててくださいな」

その動きを見ていた美琴も動き出そうとするが止められる。そして、冬風にも注意しようとするが一足遅かった。

「冬風さん！？」

彼は柵を乗り越えて、もう駆け出していた。

「分かってる！強盗のほうはおメエらに任せる！あの煙で銀行内に人なんかいたら大事だ！」

「しかし、貴方はLEVELEOなのでは？」

「俺がどれだけ強いかはそのビリビリにでも聞いときな！」

それだけ言うと、冬風は、空間移動の能力を“ある”にして、銀行内へと飛んでいった。

「うし、中に来たな。『煙の物質を解析できる』」

冬風は、来てとりあえず煙に含まれる有害物質を取り除こうと考え、煙の物質を解析し始める。

「これとこれと、これと……これは有害物質だから削除つと。」

煙の物質を解析した冬風はその物質を、未元物質で酸素などに変える。まあ、酸素とかは無色無臭だから、大丈夫だろう。

「怪我のある奴はいるか？居るなら名乗り出る。」

そう注意を促した後、恐る恐る、一人の学生が手を上げる。

「すみません、友達が、煙を吸い込んでしまって苦しそうにして、
「見せてみな。」

冬風は、その学生の友人に近づくと、煙を吸い込んだことを幻想に変える。すると、学生は、何事もなかったかのように復活した。学生は、泣きながら冬風にお礼を言う。冬風は、

「他に怪我をしたりした奴はいるか？」

誰も手を上げなかったため、外に出る。

「オイ黒子。中は終わった。お前はどうなっている。」

「こちらは大丈夫ですわ。」

冬風が眼をやると、そこには、大の男が、二人ほど転がっていた。

「よし、これで解決だな。」

冬風が、そういったとたん、反対側から、悲鳴が聞こえてきた。そこには、涙子と、男が相對していて、男が、蹴るモーションに入っている。

「つち！面倒な！」

つと、一方通行の能力を使い、男を蹴り飛ばそうとするが、一足遅く、涙子が、男に蹴られてしまう

美琴のキレタ声があるが、冬風はとりあえず冷静になり、涙子の無事を確認する。

「おい、涙子大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です。」

「大丈夫じゃねえな。」

つと、そこで、涙子が蹴られたことを幻想にして、立ち上がる。その顔には、怒りしかなかった。

「下種やるうが……。ぶつ殺してやる！！！！」

そこで、男が乗り込んだ車が発進する。だが、後ろには、仲間がい

るのでUターンしてくると、推測した冬風は迎撃する為の炎を手に纏わせ始める。後ろには、美琴がバチバチと放電していた。

「俺も混ぜる美琴。」

「足引つ張つたら許さないわよ」

「大丈夫だ。発火能力のLEVEL6並の炎だ」

「アンタ本当に規格外ね」

「心配するな自覚はない」

簡単なやり取りを済ませる。やがて、その乗用車がこちら目掛けて突撃するように猛然と加速し出した。それを見ながら、怒りに満ちた冬風は、

「おメエもついてない。」

一方通行の能力を使い、向かってくる車のベクトルを、下方方向に向ける。車は、つぶれかけ、道路が凹んでいる。

「まさか俺を、怒らせるとはな。」

そう言うが早いか、ベクトルを上向きにして、天高く車をほうり、手に纏わせていた炎を放つ。

「doomflame（破滅の炎）」

一瞬にして、車は原型がなくなり、大変なことになるが、そこで終わらず冬風ではない。

「やっちまえ美琴。」

「当たり前よ」

空を駆け抜けた一枚のコインは、止めとばかりに乗用車の後部座席から後ろを根こそぎ吹き飛ばしていった。ぼろぼろと落ちてくる破片その中に、前部座席のシートが落ちてくるので、一方通行で、スピードを落とす。つで、落ちてきたシートに乗っていた男は、髪の毛が燃え、気絶していた。

「俺を怒らすからこんなことになったんだ。以後気をつける。」

「何なんだよ……あいつらは……」

道路で、寝かされていた男が疑問の声を上げる。黒子がそれに説明するように答える。

「……片方は学園都市二三万人の頂点、七人の超能力者（レベル5）の第三位。《超電磁砲^{レベルガン}》御坂美琴お姉様。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの。」

そして、涙子や、美琴から聞いた。ありえないような能力を持つ人物を説明する。

「もう片方は、“ある”を“ない”にし、“ない”を“ある”に変える。規格外なLEVEL0幻想作りの暁冬風さんですの。」

視線の先で立つ二人を見ながら、黒子は笑みを浮かべた。

O f t h i s i s j u s t a n e x t e n s i o n o
f P r o l o g . T h e s t o r y s t i l l d o e s
n o t s t a r t (こ ん な の は 、 プ ロ ロ ー グ の 延 長 に 過 ぎ な い 。
ま だ ま だ 物 語 は 始 ま ら な い)

事件解決！（後書き）

わくわく。明日から旅行だ！昨日は、部活の試合でつかれたけど、それもひっくるめて明日は休む！！（でも、投稿はするかも）

何気ない日常（前書き）

食蜂さんの口調とか説明があってるのか自信ないです。

何気ない日常

ただいまの時刻は7時ジャスト。その学園都市の裏路地を冬風は歩いていた。

「まったく！あのババアめ、俺に面倒な仕事押し付けやがって。」

彼が愚痴愚痴言うのには理由がある。

銀行強盗事件の後、警備員などに、事情聴取を受けた冬風に、一件のメールがあった。

『裏路地にいるスキルアウトを殺してくれ。』

一週間に何度かくるなどの女を名乗る奴から送られてくるメールだ。まあ、暇つぶしにはなるので、仕事を請けるようになったのだが、最近はどうも量が多い。

なので、冬風はイライラしているというわけだ。

愚痴愚痴言っていると、目的のスキルアウトが現れた

「お前何もんだ？」

「俺たちの縄張りだって知ってきてんだよなあ？」

「金出せや金」

十数人のスキルアウトは冬風を取り囲む。だが冬風は微塵も動じないで、

「うるせえよ社会のゴミ共俺が直々に殺しに来てやったんだ迅速に死亡しろ。」

「ンだと？テメエ状況が分かってんのか？」

その瞬間、一人のスキルアウトの首が飛んだ。冬風のその手には、日本刀が握られていた。

「てめえ、それどつからだしやがった！！！！」

「答える義務はねえ！」

そして、また、二人三人と、斬っていく。そして、完成したのは、人間の死体の山だった。

「退屈だ。」

その言葉を残してその場を去ろうとしたそのときだった。

「あれえ？何で不良がないのかなあ？」

そこに現れたのは、冬風が最も苦手とし、この世で一番会いたくな

かった女であった。

星の入った瞳に背に伸びるほどの長い金髪に、常盤台中学の制服を着用している他に、レース入りのハイソックスにレース入りの手袋を着用して、レースは蜘蛛の巣を連想させる模様となっている。そして、中学生とは思えない巨乳。スキルアウトのたまり場に突っ込んで、頭の中を滅茶苦茶にする極悪女

じょうへいはいなかれい

食蜂操祈だ。

「(一番会いたくないやつが出てきたよ。畜生！今日は厄日だ！)」
冬風は、食蜂から、全力で逃げようとしますが、まあ、直線上にいるのに、姿が見られていないわけがない。

「いたあ！」

「つち！面倒な！！」

しかも、彼女は、冬風をスキルアウトの不良と間違えたらしく、能力を使ってくる。その瞬間。

——パリーン

つと言っ音が、空間に響き渡る。そして、食蜂の視線の先には、左手で、空間を殴っている、冬風の姿があった。

「あつぶねえ！！咄嗟に当麻の能力使ってよかったよほんと」

冬風は、“左手”に自らの親友、上条当麻の“右手”に宿る神よりも強い能力“幻想殺し”をある状態にして、食蜂の能力を打ち消したのだ。

当然、上条の能力を知らない、食蜂は、パニックになる。

「（何で能力が使えなかったのかしらあ？）」

そこで冬風は、とある行動に出る。自身の身体能力をフルに使用して、食蜂の、横を通り抜ける。

一方通行で、脚力を異常なほど高くして、重力操作で、自身にかかる重力を宇宙空間と同じぐらいにしている為、それこそ、光速並に早い。で、結果は成功見事に食蜂の後ろを取る。

「LEVEL5の食蜂といえども、校則位は守りな。じゃあな。」

「待つて。あなた何者なのかしらあ？私の能力が、打ち消されるなんて初めて何だけどお」

「通りすがりの無能力者。もう二度と会いてくねえな。それじゃ」

そのまま冬風はダッシュで帰っていった。

「（顔は覚えたから、後で調べてみようかしらあ）」

絶対に次に会いたくないものに、絶対に会うという最悪のフラグを残して

仕事が終わったことをメールで伝え、部屋に戻ると、いい匂いがしてきて、靴が置いてある。

「（最愛が帰ってきたな）」

実は、冬風には絹旗最愛という誠光中学一年生の義妹がいる。なぜそうなったかと聞かれたら、どっかの研究員っぽいやつらに絡まれていたところを助けて、その研究所をぶっ壊したら、泊まる場所がないと言われたので、とりあえず、中学のころから、寮に住まわせている。昨日までは、友達の家に泊まってくるといつていたので居なかった。

「ただいま、最愛」

「超お帰りなさいですお兄ちゃん 超ご飯できてますから超早く食べましょう」

ちなみに、超〜が口癖であり、なぜかB級映画が大好きである。

とりあえず、リビングに行く、それはまあ豪華な料理がそろっていた。二人で席に着き、

「いただきます」

つと夕飯を食べ始める。その日の夕飯もとにかく美味しいのだが、毎回毎回思っていることを聞いてみる。

「なあ最愛。お前学校の寮に住む気はないのか？いつまでも俺の寮にいるわけにはいかねえんじやねえの？」

最愛は、胸を張って、

「超大丈夫ですお兄ちゃん。校長に、ここに住まわせないと超殺すぞって言ったら超認めてもらいました。」

「いや駄目だからね！！校長脅したら駄目だからね！！」

今度、校長に謝りに行くという行事が増えた冬風だった。

It can be destroyed even know
what day is responsible for th
e casual fantasy)何気ない日常それが壊される
ことは幻想を司るものにも分からない)

何気ない日常（後書き）

これで今年のとある最弱の幻想作りを終えたいと思います。
皆様よいお年をそして、新年に会いましょう！！（まだ冬休みの宿題が終わっていない作者より）

あと、最愛の学校の名前はオリジナルなのですが実在してたら教えてください（速攻で変えます）

色々な最強たち 第一位 (前書き)

お久しぶり＆新年明けましておめでとございます！時間かかりましたけどござー！

色々な最強たち 第一位

「レーター、絶対お前の所為だろこれ、どうしてくれんだよ馬鹿！」

「あんましかつかすんなよなア」

さて、今冬風は、親友である一方通行と共に、風紀委員117支部に来ていた。理由は簡単、こういうことだ、

朝、冬風は、最愛に起こされて、学校に行く支度をしていると、いきなりケータイがなった。連絡表示をみて固まったのは言うまでもない

「もしもし、何のようだレーター」

『なア、今からチヨイ話があるんだがいいかア?』

「俺今から学校なんだが」

『休め!』

「はいはい分かりましたよ。学園都市第1位様」

ツー、ツー

あまり好きではない、むなしい音がケータイから鳴り響く。冬風は、無性に叫びたくなった。

「ふ・ざ・け・ん・な――――!!!!!!」

「お兄ちゃん!超うるさいです!」

「ごめんなさい」

昼少し前、冬風は噴水の前に来ていた。レーター、もとい、一方通アクセラレー行に理不尽な呼び出しを喰らったのはいいが、当の本人が全然来ないのだ。

「あんのやろう、来たら叩いて伸ばしてジャンケンポンにして、モヤシ炒めにして、サンキュッパで売ってやる！！！！」

学校休んでまで来たのに、遅刻されてだいぶ腹が立っている。一人で、静かな怒りを燃やしていると、目的の一方通行ターゲットが来た。

「悪い、遅れたみてエだなア」

「そこを動くな、モヤシ炒め。今からサンキュッパで売ってやる」

「アア？ぶつ殺すぞ」

「冗談はさておき、何のようだ？レーター」

「いや、飯でも食おうと思ってなア、冬風」

「やっぱりか」

冬風も、大体こんなもんだと思っていた。一方通行もといレーターは、自分が、外食しようと思ったとき、必ず冬風を誘うのだ、どんな日であっても。

「つま、行くか、レーター」

「あア、そうだな」

二人は目的の店、（食べるときは必ず同じ店なので冬風も覚えてい）へ、歩を進める。

「お前、またなんか実験の依頼来てんだろ？」

「どオ、してわかんたア？」

「お前が外食するときは、決まって面倒な実験があるときだ。俺は今回の実験知ってるしな」

「はア？何で、無能力者認定のお前が実験の事知ってたんだよ？」

「俺も、アレイスターのクソ野郎にその実験をやらされるかもしれん

ねえからだつつの。ったく」

「おいおい、人形つってもお前は人殺し大嫌いじゃなかったかア？」

「まだやってるとはいってねえだろ。俺はもちろん断るさ、さあ着いたみてえだぜ」

そこは、ステーキが美味しいと評判のレストランで、高級レストランでもある。ここで冬風と一方通行は、毎回、一方通行のおごりで飯を食べている。

「冷凍食品と肉と缶コーヒーだけで生きてるってある意味超人だよな」

「うるせエなア冬風。好きなものを食って何が悪インだよ。お前はバランスばっか考えやがって、」

「家の義妹がうるさいもんで」

「そりゃアよかったなア」

そういつて、一方通行は、また口にステーキを運ぶ。冬風は、グラタンが冷めるのを待っている。

「っで、今回俺に頼みたい事はなんだ」

「別にイ、俺は毎回毎回お前エに頼りはしねエよ」

「そうかい、ならいいんだけどな、絶対に無理すんなよ」

「わかってらア」

勘定を済ませて、店を出る。そして、二人で少々話しながら歩いているときだった。

「レーター、分かってるな。」

「当たり前エだア。誰だと思ってやがる」

「お前の能力借りるぞ」

「あア」

そこまで言うと、二人から見える、高いビルのうえからこんな音が鳴り響いた

ドガンー!!!

二人に向かって、ロケット弾が、発射されていた。(主に一方通行を狙って)

「はじき返すぞレーター」

「分かってらア冬風」

二人はロケット弾を、ベクトル操作で、はじき返す。ここで、冬風はあることに気がついた。

「あ!!!」

「どうしたよオ、冬風」

「バカ!!!!!!よく考えろ!今発射されたのは、ビルの上、そこにあんなもん打ち返してみろ、ビルが崩れるぞ!!!」

「あア、……やベエな、けどお前ならなんとかなんじゃねエか?」

一方通行は、冬風を見てニヤリとしている。無性に腹が立つが仕方がない

「つち!人使いが荒いモヤシ様だぜ!」

精一杯の皮肉をこめてさういうと、ロケット弾そのものを、“ない”にした。さつきまで音を立てて飛んでいたものが突然消えた事で、回りの人間は驚いているが気にしないでおこう

「さて、こんな悪戯をしてくる輩には死の鉄鎚が必要だと俺は思ったんだがどう思う？」

「行こうぜエ相棒」

「そうこなくつちやなレーター」

二人は、先程自分達に恐ろしいものを放ってきた人間に対し報復を始めた。

ついで、冒頭のシーンに戻る

「早く反省文を書く！！あなた達二人はこれだけ溜まってるんだか

らね！」

そういつて大量の始末書を二人の前に出す。セミロングヘアに眼鏡をかける巨乳のクールビューティー固法 美偉（このり みい）

実は、この二人毎回毎回問題を起こしては、風紀委員が来てから逃亡するという問題児なのだが、今回は警備員アンチスキルまで、登場した為に、二人は逃げる事もできたのだが、冬風は一応無能力者なので、捕まっつて反省文を書いているのだが量が多すぎる。

そこへ、この支部で、一番会わずに帰りたかったグループが来てしまった。

「パトロール終わりましたあ」

「ただいま帰りましたの」

「暇なんで遊びに来ました」

上から、初春、黒子、美琴の三人である。その声に冬風はビクツとなる。一方通行は、それを見てニヤニヤしているので睨んでやった。3人は中に入ってくるのだが、入った瞬間信じられないものを見たという顔になった。

「固法先輩、その、始末書なんですか？」

「このバカ二人が溜めに溜めまくった始末書よ————」
「こら！
逃げるな！」

固法が、ちよつと眼を放した際に、二人は、窓まで走っていきこうと
していた。

「窓まで来ればこっちのもんだ！あんな量書けるかつっのー！」

言つちや否や、窓を壊そうとするが

「冬風さん、ちゃんと書いてくださいまし」

黒子に捕らえられた。

「何しやがる！黒子！」

「そうだなア、パンダ」

「パンダ!？」

思いもよらないネーミングに驚愕の表情を浮かべる黒子、力づくで逃げようとする二人だったが、あっけなく固法に抑えられた。つで、また机に向かって反省文を書く

「アンター一体何したのよ。こんなにたくさん普通はたまらないですよ」

美琴が引きつった顔でたずねる、奥の初春は、苦笑している。

「まあ、レーターと一緒にいたらいきなり襲ってきたやつがいるから、心配停止状態にしたら警備員まで来て捕まった。風紀委員だけなら何とかなつたのに」

「アンタバカでしょ」

「隣の奴よりはましなはずだ」

「うるせエよ冬風、最初に誘つたのはお前エだろうが」

「はいはい、分かってますよ我俣一方通行君」

そこまで言つと、黒子と初春の顔がまたも驚愕した顔になる。

「一方通行って、あの有名な？」

「当たり前だろ？」

「ほんとに冬風さんはLEVEL5の友達が多いんですね」

「ああ、なぞの第6位以外全員にあってしまった。一番会いたくなくなかったあの女にも会ってしまった。」

「冬風さん、あの女とは一体どなたですか？」

「お前らで言う女王様。あのメルヘンホストよりタチが悪い最悪な奴だったぜ、思い出すだけで腹が立つ！」

「落ち着こうぜエ？冬風」

「すまんレーター」

「成程、だからアイツ何か一生懸命探してたのか」

美琴が何気なく言った台詞。それは、冬風に対しての死刑宣告であることを彼女は知らない。

「おい、美琴、それは、本、当、か？（ガクガクブルブル）」

「落ち着きなさいよ、何もそんなに本気で震えなくても」

「おい、終わったから俺は帰っていいか？ア」

「そうね、帰ってもいいわよ、あなたも、一方通行君が書いてくれるから」

「本当！サンキューレーター」

「俺が誘ったんだからなア、帰ろうぜエ」

「だな、美琴、パンダ！あいつに会ったら俺を探さないでくださいお願いしますって俺が言ってたって言っというてくれ！」

「ちよつと待ちなさいよ！せっかく会ったんだから勝負しな「嫌だじゃあな」ってオイ！」

二人は全力で、117支部から離れていった。

しばらく行ったところで、

「よく我慢できたなアイツ」

「そりゃそうだろうよオ、一般人を巻き込むわけにやあいかねえだろ」

「そりゃそうか、まあ、適当に実験終わらせな、じゃな」

「おう、サンキューな」

二人は別々に歩いていった。一方通行は、残酷な実験に、冬風は、自らの義妹が待つ平和な自宅へ、真逆の道を歩いていった。

They are still unaware, as enemies to fight each other and their subsequent (彼らはまだ気づかない、この後自分達がお互いを敵として戦うことに)

色々な最強たち第一位(後書き)

ひゅ〜疲れたような疲れてないような、次回も頑張ります!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824z/>

とある最弱の幻想作り

2012年1月6日11時46分発行